

松尾芭蕉は「おくのほそ道」の旅で、全行程の三分の一に近い四十日を県内で過ごし、数多くの名句を紡ぎ出した。三百年近くたった今なお、それら作品群は人々を魅了してやまない。芭蕉が県内に残した文学的、歴史的産物を見つめ直し、観光振興に結び付けようと、東京のまちづくりグループ「元氣・まちネット」（矢口正武代表＝戸沢村出身）のメンバーは、出羽三山から酒田市内、鶴岡市鼠ヶ関までの芭蕉の足取りを四日間にもわたり踏査した。以下はその同行記。

（報道部・高橋澄憲）

芭蕉の道とたどる

「元氣・まちネット」庄内踏査同行記

まちネットは今春、最上町山は現在、月山は過去、湯殿から庄内町までの区間で芭蕉山は未来を表すとも言われての足取りをたどっている。前回は、出羽三山をこの順に登りに続くこの旅は、鶴岡市のことは、時間を旅し、一度羽黒山参詣から始まった。一死んで生まれ変わる」と行を案内してくれるNPO法人 梅津さん。

人芭蕉翁「おくのほそ道」が続き、両側には樹齢三百年のトワーク理事の梅津保一が続き、五百年のスキの巨木が並び、が月山に登った時と同じよう、喧嘩（けんそ）は消え、ひに白装束で現れ、一行を驚かすやいとされた神秘的な雰囲気

に包み込まれる。間もなく平羽黒山、月山、湯殿山から将門建立とも伝わる国宝五重なる出羽三山は、古来修験道塔が現れた。「五重塔に祭らの聖地とされてきた。「羽黒

羽黒山参詣

修験道の聖地、神妙に

「地元の人もっと知って」

神妙な面持ちになる一行。山頂へ向かう参道から、小来た時には、スギはもっと若道五百ほど入った場所にく、石畳も敷いたばかり。今追悼文を寄せている。高校時代に羽黒山に登った、信さん(31)＝山梨県甲斐市。にこそ、もっと知ってほしい坂と分けられる。し「ありがたや雪をかほらすかやぶき屋根が見事な三神

南十字星。ここには宇宙そのものが閉じ込められていて、山伏たちは宇宙に見詰められた。梅津さんのと、茶屋が立つ場所からは、解説に、現代の山歩きとは全く趣の異なる修験道に思をほお張り一休みしている。寄った。木々が高くそびえ、と口数が少なく、を書いてくれた。月は見えそくない。芭蕉が

とりわけ急こう配で知られる二の坂を、メンバーは汗だくで進む。厳しい坂を登り切った所に茶屋がある。立ち寄る老木だけがかつての面影をしのぼせている。「涼しさやほ



石段の途中にある茶屋で、健脚証明書をもらい笑顔の踏査メンバー 羽黒山

かけ登った。あの時にはこんないい場所だとは気付かなかつたなあ」としみじみと語ったことから観光談義に。「一度観光で行った

合祭殿に参詣 ことがある場所には行きたくした。山頂にない、という声をよく聞く。は、羽黒山中 地元の人には特に、小学校の遠興の祖と仰が 足などで一度来て、あとはもう行かないという人も多いのでは」「子供のころには分

れた別当天有 法印を祭った 際には「子供のころには分らなかった良さがたくさんあるのに、もったいない」。すっかり羽黒山の魅力に取りつかれたメンバーは、地元の人

芭蕉の道とたどる

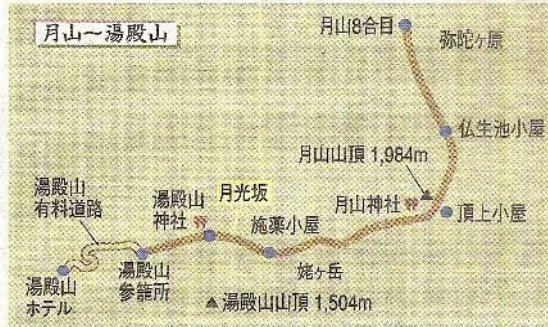
「元氣・まちネット」庄内踏査同行記

「古人の跡を追わず、古人 おくのほそ道を体験できなかったら
の求めたるものを求めよ」 いいね。そう言いつて送り出
し。松尾芭蕉がたどった足 してくれた。

取りを踏査した東京のまちづ 旅は二日目。メンバーは鶴
くりグループ「元氣・まちネ ット」(矢口正武代表、戸沢
村出身)を案内してくれた NPO法人芭蕉翁「おくのほ
そ道」ネットワーク理事の 梅津保一さん(67)は、一行
に芭蕉のこの言葉を教えてく れた。

芭蕉がおくのはそ道を旅し たのは、四十八歳の時。「芭 蕉は、もう二度とここを訪れ ることはできないだろうと、 一步一步を踏みしめ、出会っ た人、風景に全身全霊で向か っていた。だからこそ生まれ た名句がある」。梅津さんは 「一期一会の思いで旅した芭 蕉の心は今も変わらず生きて いる。皆さんもわたしの

月山 湯殿山



しい工藤隆弥さん (67)「寒河江市」 がガイドを務め た。小降り(雨の

中、まずは月山山 頂(標高一、九八 四)を目指す。 リンドウやミヤマアキノキリ 石垣の間からオコシヨがびよ

紅葉「まるで日本庭園」

一期一会思いかみしめ

一行が訪れた九 月下旬には草紅葉 が始まっており、 緑の中に黄色い草

急峻(きゆうしゅん)な斜面 山を後にした。(報道部・高橋澄恵)

行はたびたび足を止め ては、鮮やかな赤や黄 に染まった景色に見入 る。阿部智信さん(34) 「これほど高地に、ま るで日本庭園のような 場所があるなんて」と 感嘆の声。



木々が色づい 岩全体を浸している。神秘 していた月山。の領域とされ「語るなかれ、 険しい道のり 聞くなかれ」との戒めは芭 蕉のころと現在も変わらず、 折足を止めて 写真撮影もできない。はだし 美しい光景に なり、二神体に登ると、 見える「先月 疲れた足に熱い湯が染みこむ よう。

殿山方向へ下 八十年代でもこの坂を下りるん 山する。下り だよ」という工藤さんの話に、 は岩が露出 一行はただ驚くしかなかっ し、歩くのが た。 つらい。中で 月光坂を下り、たどり着い か。 も湯殿山に下 た湯殿山神社。おほらいを 受け参詣する。本殿も拜殿 所とも言われる出羽三山。一 行は、それぞれの思いを胸に

(報道部・高橋澄恵)

芭蕉の道とたどる

「元氣 まちネット」庄内踏査同行記

松尾芭蕉の足取りをたどる東京のまちづくりグループ「元氣・まちネット」。踏査三日目は、酒田市内を巡った。地元の郷土史家・田村寛三さん(78)を訪ねると「芭蕉は九日間も酒田に滞在した。よほど気に入ったのだろう」といっ

出羽三山で「不易流行」を体得したとも言われる芭蕉は、その後「暮き日を海に入れたり最上川」など壮大なスケールの句を紡ぎ出した。一方で「それまでわび・さびの句が多かったが酒田では、軽みを出した句も詠んでいることに注目したい」と田村さんは続ける。

芭蕉が豪商・近江屋三郎兵衛宅で行われた句会に招かれた時のこと。もてなしにウリ

酒田から鼠ヶ関へ



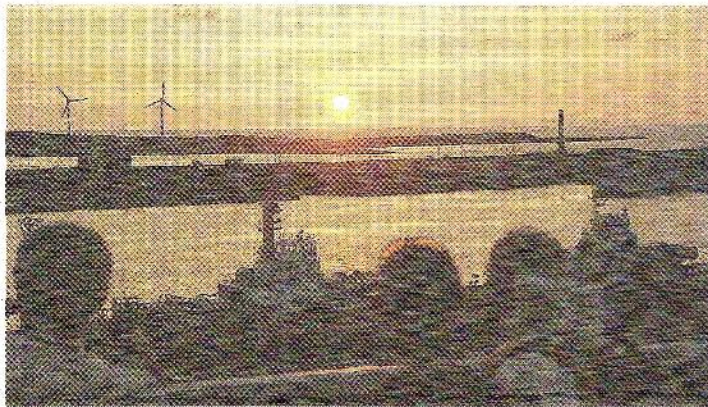
楽しい滞在「遺墨で知る」

「足跡結び 魅力的な旅に」

が出されたが「句なきものは 噺事あたはし(俳句を作らなれた土地から外へ流出して 日和山公園に向かった。真っ足取りを結び付

ければ食べてはいけない」と田の人たちのもてなしに心を「元氣・まちネット」は、芭蕉、源義経、英国人旅行家のイザベラ・バードを「三賢者」と位置付け、三人の足取りを結び付

しまつことが 赤な太陽が海に沈む瞬間に息をのむ。公園にたたずむ芭蕉の懐紙は酒田 像。古人もまた同じ太陽を見つめていた。酒田市内の移動手段は、酒田観光物産協会が無料で貸し出している自転車。芭蕉が滞在した伊東不頼の跡も残り、玉宅跡など市内に残るさまざまな史跡にも立ち寄った。最終日の四日目はあつみ温泉へ。現在は記念碑が立つだけ。芭蕉が泊まった鈴木所



酒田港に沈む夕日を見ながら、芭蕉に思いをはせる踏査メンバー 酒田市・日和山公園

の、かつて関所があったとされる古代鼠ヶ関址を見学し、旅のゴールとした。「山形にはいろんな人の出入りがある。文学や宗教、歴史、さまざまな分野で興味の持てる内容だった」と踏査メンバーの橋田秀治さん(60) 東京都板橋区。

観光地までは車で行くことが前提と考えがち。元氣・まちネット代表の矢口正武さん(61) 東京都渋谷区、戸沢村出身は「ウオーキングや自転車の愛好者が増えている今、歩いたり、自転車でも歩きたい人もいます。名所から名所への距離を表示したマップがあれば、そうした人たちにも応えられる」と語る。「芭蕉の足跡は県内各地に残っている。点在するスポットを物語のように結び付けることで、魅力的な旅になる」と矢口さん。「行政の枠を超え、県民一体となって観光資源を掘り起こしてほしい。山形をもっと元氣にしたい。そのためアイデアを提案していく」と力を込めた。(報道部・高橋滄恵)